中古語における動詞の用法

――上代語からの継承と独自の達成――

佐佐木　隆

一

中古の諸文献に見える個々の表現や言いまわしについて、これは『萬葉集』の某歌を背景とするものだとか、これは『萬葉集』の某歌から学んだものだとかというかたちで、上代の歌との関係を指摘する解説が注釈の類にしばしば見える。しかし、古代語を研究する立場からすれば、それらのほとんどは断片的でその場限りの指摘にとどまるという点で、いさか不満を禁じえない。中古の文献に見える特定の語句が上代のそれとかかわりをもつことを指摘しているのだから、確かにそれらは史的な観点に立つ指摘なのだが、結局は中古の語句を上代のそれに引き戻したかたちの解説でしかない。つまり、それらは、中古での達成や独自性を指摘するかたちでの解説ではないという点に、ある種の物足りなさが残るのである。

本稿では、中古の文献に現れるさまざまな構文のうち、動詞を用いた数種の構文のありかたに、言及の対象を限定する。そして、それらが示す文脈上・表現上の特徴を、上代語から中古語へという史的な観点に立って検討するだけ

でなく、中古における構文面での達成と独自性とはどのような点にあるかについて、私見を具体的に述べる。

当面の資料となるべき、分量の面で上代の文献を代表する『萬葉集』と、中古の早い時期に成立した『竹取物語』『伊勢物語』『古今和歌集』『土佐日記』などとの間には、言語面で一〇〇年から一五〇年以上、見かたによっては二〇〇年に近い時代的な開きがある。したがって、右にあげた中古の四作品では、上代から受け継いだ構文もある程度の変容を遂げている可能性が、十分に想定できる。また、それだけの長い期間には、動詞を用いた構文が新たな用法を獲得してはいても、特に不思議なことではない。

以下の論述では、上代語の構文を取り上げた近時の小論に基づいて、(1) 上代語から中古語にかけて起こった構文の変化と、中古になって新たに獲得された構文の用法とを、表現や言いまわしの実例を見ながら確認していくことになる。その実例とは、言うまでもなく、右の四作品に見えるものである。ただし、『源氏物語』が成立する以前に成立した、比較的古いいくつかの作品からも、必要に応じて実例を引用することがある。

二

近時の小論のなかで、上代語に関して最も多くの例をあげ、また最も多くの角度から検討を加えたのは、「同族目的語構文」と呼ばれるもので、特定の動詞を用いる時にだけ成立する構文である。そこで、本稿でも最初に、同構文に属する表現について検討する。

上代の文献に見える具体的な同族目的語構文の例としては、「眠（い）を寝（ぬ）」「音（ね）を泣く／音を鳴く」「心を思ふ」という三種の表現がこれまでたびたび取り上げられてきた。また、三種の表現に似た点のある例として、「命生く／命死ぬ」

という表現も同時に取り上げられることか多かった【「命生く／命死ぬ」では、名詞の「命」が目的語ではなく主語として用いられており、あえて言えば、「同族主語構文」とでも呼ぶべきものの例である】。

また、近時の小論では[2]、右にあげた四種の表現のほかに、次の二十種ほどの表現も同族目的語構文あるいはそれに準じる構文だと認めたうえで、用法・意味のありかたを一つ一つ検討し、私見を述べた。

楯（を）立つ　遣ひを使はす　印を押す　祝詞を告る　鏡を見る　形見を見る　目を見る　夢を見る　守る　嘆き（を）嘆く　枕をまく　言を云ふ　耳を聞く　言（を）問ふ　声（を）呼ぶ　手（を）握る　足（を）踏む　香を嗅ぐ

これまで検討されてきた四種の同族目的語構文は、どれも中古語へと継承された。しかし、四種の具体的な言いまわしにおいては、時には明瞭な変化が、また時には微妙な変化が、それぞれの表現に起こっていたようである。

「眠を寝」あるいは無助詞の「眠寝」は、『萬葉集』に四十余例ある。これに相当する言いまわしは中古にもあり、「夜は安き眠も寝ず」〔竹取二〕、「起き伏し夜は眠こそ寝られね」〔古今十二・六〇五〕、「吾や眠を寝ぬ」〔同十五・七六七〕、「夜は眠も寝ず」〔土佐一月二十日〕の四例が、四作品のなかに見える。

四例のうち三例に共通するのは、「夜は」を伴うかたちになっている点である。上代の例では、寝ることは一般に夜に行う動作だという理由からだろうか、あえて「夜は」という語句を添える必要はなかった。上代語には、「夜眠も寝なくに（用伊母祢奈久尓）」〔萬五・八三一〕のように「夜眠」という複合名詞があった。また、「安眠な寝しめ（安宿勿令寐）」〔萬十九・四一七九〕のように、「安き眠」に相当する「安眠」という複合名詞もあった。だから、そ

れらを用いることによって、「眠を寝」の具体的な状況を表すことが十分に可能だった。中古語では、上代語にあった「夜眠」を用いずに、「眠を寝」に「夜は」を添えたり、上代語の「安眠」を「安き眠」と表現したりしたというのは、つまりは言いまわしがそれだけ分析的になった、ということである。その点に、上代語と中古語の時代差がよく表れている【より分析的な表現へという時代的な流れはほかのいくつかの点にも現れている、ということは前稿でも具体的に述べた】。

「音を泣く」「音鳴く」は、『萬葉集』に三十余例ある。これもまた、中古へと継承された。『伊勢物語』の歌に、「音をこそ泣かめ」〔伊勢六五〕の例が見える。また、『古今和歌集』には十を超える例があり、それらは「音を…」と「音に…」との二種に分かれる。『土佐日記』には、地の文に「音のみぞ泣く」〔土佐一月九日〕があり、歌に「音をば泣く」〔同〕がある【『伊勢物語』の章段を表すのに一般には「六十五」「百二十」などの表示を用いるが、本稿ではそれを「六五」「一二〇」のように簡略化して表示する】。

『萬葉集』に比べれば、四作品だけでは歌の資料がひどく少ない。そこで、『古今和歌集』に続く『後撰和歌集』にまで調査を広げると、同集には二十を超える「音を泣く／音に鳴く」の例が見える。二十余例のうち、上代に例が見えないのは、「音は泣かれける」〔後撰四・一八五〕や「音は泣かるらむ〔同十・六六一〕のような、主格の「は」を伴い、かつ「泣く」の部分に「泣かる」という自発の表現を用いた言いまわしである。上代からある表現が中古になって拡張されたものであり、いかにも中古ふうの言いまわしだと言えるだろう。

「心を思ふ」は、上代では歌だけでなく散文にも用いられ、『萬葉集』に三十を超える例がある。しかし、中古では、早い時期の例が歌に少数見えるだけである。『古今和歌集』には、「山の井の浅き心を思はぬに…」〔古今十五・七六四〕と「玉の緒の短き心思ひあへず…」〔古今十九・一〇〇二〕の二例があるが、どちらについても『萬葉集』に類

似する表現が見えるから、『萬葉集』の影響を直接に受けた表現のようである。また、「心を思ふ」を変形したと言える「思ふ心」も、『古今和歌集』に三例ある。しかし、「心を思ふ」がそれ以降の人々にあまり好まれなかった表現であることは確かであり、実例は諸文献に散発的に見えるだけである。

ところで、

1　わたつみの　沖を深めて　思ひてし　思ひは今は　いたづらに　なりぬべらなり…　〔古今十九・一〇〇一〕

2　深くのみ　思ふ心は　葦の根の　分けても人に　逢はむとぞ思ふ　〔後撰十・六八〇〕

という二首に見える、「沖を深めて思ひてし思ひは…」と「深くのみ思ふ心は…」とは、たがいに類似する表現である。これらの表現を極度に単純化すれば、一方は「思ふ思ひ」となり、他方は「思ふ心」となる。両歌では、類似する構文のなかで「思ひ」と「心」とが、名詞として対応している。2の「思ふ心」は、同族目的語構文の「心思ふ」を変形したものに一致する表現であり、その目的語の「心」に代わって、「思ふ」の連用形名詞が用いられたものである。

上代の「八尺（やさか）の嘆き（を）嘆けども（八尺乃嘆嘆友）…」〔萬十三・三三四四〕は、同族目的語構文の一例である。それを変形したものが、「吾が嘆く八尺（やさか）の嘆き（吾嗟八尺之嗟（わがなげくやさかのなげき））…」〔萬十三・三二七六〕だと言える。「嘆き（を）嘆く」では、「嘆く」という他動詞の目的語が、そのまま他動詞の連用形を名詞にしたものになっている。1の「思ひてし思ひ」もまた、同族目的語構文ならば、「心（を）思ふ」と同意の「思ひ（を）思ふ」という言いまわしになっただろう、と推定できる。

上代に実例がなく、中古の四作品に見える同族目的語構文の表現には、「船歌（ふなうた）歌ひて…」〔土佐一月九日〕に対して「歌ふ船歌」〔同一月二十一日〕がある。また、「ものもものしたばで、ひそまりぬ」〔同一月九日〕は「物を物す」の例であり、「物も召し上がらずに、ひっそりと寝てしまった」の意である。一方、「恋ひをし恋ひば…」〔古今十一・五一二〕は、同族目的語構文の例であるように見えるが、反復による強調表現だと見るのが妥当だろう。あるいは、強調のために同族目的語構文を用いたのだとも言えそうであり、そのように理解してよければ、同構文が新たな用法を獲得したことになる。

「同じかざしを挿しこそはせめ」〔後撰十二・八〇九〕、「吾が恋の数を数（かぞ）へば…」〔後撰十二・七九五〕なども、上代には見えない同族目的語構文の例である。前者の言いまわしには「かざし」が含まれているが、この語はもともと「髪挿し」の意だと解説している専門的な古語辞典が、複数ある。それに従えば、「かざしを挿す」のもとの語構成は「髪挿しを挿す」だから、これは同族目的語構文の例である。類似する上代の散文の例には、宣命の「印（おして）を押して（印乎押天）…」〔二八詔〕があり、その「印（おして）」は「押し手」に由来する。

さきに、「同族主語構文」とでも呼ぶべきだと述べた「命生く／命死ぬ」だが、『萬葉集』には「命生く」が五例あり、「命死ぬ」が七例ある。『古事記』の「命はな殺せ（し）たまひそ（伊能知波那志勢多麻比曽）」〔記三〕、『日本書紀』の「命死なまし（伊能致志儺磨志）」〔紀八一〕などの例もある。中古では、地の文に「命死なばいかがせむ」〔竹取七〕があり、歌に「わびはてて死ぬる命を救ひやはせぬ」〔竹取一五〕、「死ぬる命生きもやすると…」〔古今十二・五六八〕などとあるのが、めずらしい例である。また、「わづらひて心地死ぬべくおぼえければ…」〔伊勢一二五〕という例もある。その後は、数は少ないが、散文に「命生く／命死ぬ」や助詞「を」を伴った「命を生く」の例がまま見られる【「命を生く」であれば、同族目的語構文と呼びうる】。

上代には例の見えないものだが、「命生く／命死ぬ」の類例だと見てよい表現が、中古の四作品のなかに二例ある。それは、

3　かく歌ふに、船屋形の塵も散り、空行く雲も漂ひぬ。　〔土佐十二月二十七日〕

4　春霞　霞みて去にし　雁がねは　今ぞ鳴くなる　秋霧の上に　〔古今四・二一〇〕

に含まれる、「塵も散り」と「春霞霞みて」である。どちらも、中古に入ってから用いられるようになった言いまわしだろう。

3の「塵」は、もともと連用形名詞の「散り」だから、「塵（が）散り」では主語と述語動詞とが同源の語になっている。4の「春霞霞みて」は、「春霞（が）霞んで」の意と「春霞で（飛ぶ姿が）霞んで」の意とがかけてある。上代の表現では、名詞の「霞」については「立つ」「たなびく」「居る」などの動詞を用いるのが一般である。しかし、なかには、「春霞」を「春日」の枕詞にした「春霞春日の里の…」〔萬三・四〇七〕のような例がある。「春霞によって霞む春日の里」というかかりかたである。こうした用法から、4の「春霞（が）霞みて」という表現が新たに生まれることになったのだろう、と推定できる。

言うまでもなく、「霞」はもともと「霞む」の連用形名詞であり、「霞みて」の主語は複合語の「春霞」である。主語と述語動詞のどちらが複合語になっていても、それらは同源の語であり、言いまわしが同族目的語構文の一例であることに違いはない【現代語の同族目的語構文の例として、「歌を歌う」「踊りを踊る」が頻繁に引用される。これらの目的語が複合語になった、「子守歌を歌う」「盆踊りを踊る」という表現もまた、同族目的語構文の例である】。

4の「春霞（が）霞んで」という言いまわしがあることから、「曇れる雲無くなりて…」〔土佐一月十七日〕という例を無視することができなくなる。「曇れる雲」を、助動詞を省略して単純化すれば「曇る雲」となるが、これは主述関係にある「雲（が）曇る」を変形した表現だと見ることが可能性である。「雲（が）曇る」の実例は見出しえていないが、「命（が）生く」「命（が）死ぬ」と「生くる命」「死ぬる命」との関係からは、「雲（が）曇る」に対して「曇る雲」が想定できるのである。

三

現代人にとってはひどく意外なことであり、小論でもその実例を掲げて論じたことがあるが、[3] 上代語には正反対の意味を表す二種の動詞、つまり反義をもつ動詞を直接に重ねることがよくあった。次に取り上げるのは、そうした構文のありかたである。

まず、『古事記』『日本書紀』『萬葉集』から実例を一つずつあげてみる。

5　伊知遅島　美島に着き　鴇鳥の　迦豆伎伊岐豆岐　しなだゆふ　楽浪路を　すくすくと　吾が行ませばや…　〔記四二〕

6　稲蓆　川副柳　水行けば　儺弭企於己陀智　その根は失せず　〔紀八三〕

7　たまきはる　命絶えぬれ　立ち躍り　足すり叫び　伏仰　胸打ち嘆き…　〔萬五・九〇四〕

5の長歌は、旅に出ている作者がその途中で見た情景を描写したものである。引用した部分にある「鳰鳥の潜き息づき」は、「鳰鳥が（水に）潜ったり、（水面に出て）息をしたりする、そのように（私が）息をして…」の意である。水鳥によく見られる、「潜く」「息づく」という正反対の二種の所作を組み合わせ、作者自身の行為の比喩に仕立てたものである。

6の歌の「水行けば靡き起き立ち…」は、川岸に生えている柳の動きについて述べたもので、「水が（流れて）行けば、（それに従って）靡いたり起き上がったりし（てはいるが）…」の意である。「靡き起き立ち」という三種の動詞の連接は、「靡く」とその反義を表す「起き立つ」の二語とを組み合わせものである。「靡く」は横になって揺れ動くこと、「起き立つ」はそこから垂直の状態に戻ることである。そのように水の流れに対応して結局は「その根は失せず」、つまり自分は逆境にあってもくじけはしない、というのである。

7の長歌では、子を亡くした親がひどく悲しむさまを、「立ち躍り」「足すり叫び」「伏し仰ぎ」「胸打ち嘆き」という四種の激しい動作を描写することによって、みごとに表現している。四種の動作のうち、「伏し仰ぎ」が反義の動詞を重ねたものであり、言うまでもなく、「伏す」は下方を向いて床や地面に体を近付けること、「仰ぐ」は逆に上方に顔を向けることである。

このような上代語の言いまわしは、「天雲の行き帰りなむ（去還奈牟）もの故に…」〔萬十九・四二四二〕、「年は来経（岐布）とも…」〔同五・八三〇〕、「伏し居（臥居）嘆けど…」〔同二・二〇四〕その他、右にあげたほかにもまだまた例がある【「佐保の山辺を上り下り（上下）に」〔萬十・一八二八〕や、「生き死に（生死）の二つの海を…」〔萬十六・三八四九〕などは、反義の動詞の連接形式がそのまま連用形名詞に転成したものである。こうして名詞化した例と、反義の動詞の連接形式が動詞のまま機能した例とは、時には識別が困難な場合もある。その点に留意する必要

がある】。

反義の動詞の連接は、現代語の例で言えば、「窓を開け閉めた」「くじに当たり外れる」「坂を上り下るのはつらい」などの組み合わせにあたる。しかし、こうした動詞の組み合わせは、聞き手や読み手を混乱させる。現代語では、二種の動詞が連接したものは意味的に密接に結び付いているために、右にあげた組み合わせでは、それぞれの動詞の表す意味が、明確な矛盾・齟齬を生じるのである【二種の動詞の連接形式を、動詞としてではなく連用形名詞として使えば、現代語でも表現は自然なものになる。「この戸は開け閉めするのがつきい」「ものには当たり外れがある」「あの長い坂の上り下りは、祖父にはもう無理だ」のようにである】。

かつて指摘されたことだが、上代語には「語り継ぐ」〔萬五・八七三〕に対して「語りし継げば（語之告者）…」〔萬二・三一三〕があり、「行き別る」〔萬二・一五五〕に対して「行く雲の行きや別れむ（逝哉将別）」〔萬十・一九二三〕がある。二種の動詞が連接したものの間に一つの助詞が位置する、こうした言いまわしの数は、『萬葉集』だけでも一〇〇を超えている。このことから、上代語では二種の動詞の意味的な結び付きが緩くて弱かったのだとか、当時は二種の動詞が意味的に結び付いた、現代語の複合動詞のようなものはまだ存在しなかったのだ、とかと言われている。そのとおりだろう。

同じことを推定させる言語的な現象は、ほかにも数種ある。その一つが、右で見たような、反義を表す動詞の連接である。動詞の意味的な結び付きが緩くて弱いものであり、「潜き息づき」「靡き起き立ち」「伏し仰ぎ」は、たとえば「潜き、また息づき」「靡いては、起き立ち」「伏したり、仰いだり」のように表示しうるものだったろう、と考えられる。現に、「梅の花咲き散る（佐伎知流）春の…」〔萬二十・四五〇二〕の「咲き散る」も、反義の動詞が直接重なったものだが、「いたづらに咲きか散るらむ（開香将散）」〔萬二・二三一〕は、同じ「咲き散る」の間に助詞が位

置する表現である。二種の動詞の意味的な関係が緩くて弱かったために、当時の人々は、二種の動詞が表す二種の現象の間に時間差を感じ取ったのだろう。

二種の動詞の連接したものが意味的に緩い関係にあったらしいことは、中古語についても同じように想定できる。「いくそたび行き帰るらむ」〔伊勢九二〕に対して、同じ二種の動詞の間に「や」がある「むなしき空に行きや帰らむ」〔後撰十三・九七〇〕のような例が少なからず見える。また、反義の動詞が直接に連なった、「この国の海山より、龍は下り上るものなり」〔竹取一一〕、「よごとを放ちて、立ち居、泣く泣く呼ばひたまふこと…」〔竹取一二〕、「立ち居る雲やまず」〔伊勢六七〕、「浮き沈む玉」〔古今十・四二七〕、「起き伏し夜は眠こそ寝られね」〔同十二・六〇五〕、「裁ち縫はぬ衣着し人も…」〔古今十七・九二六〕、「酔ひ言にこころよげなる言して、出で入りにけり」〔土佐十二月二十六日〕、「岸の波立ち返る」〔土佐二月三日〕などの例が、四作品のなかに見える【「裁ち縫はぬ衣着し人」は仙人のことで、仙人は裁ったり縫ったりしていない、無縫の天衣を身につけていた、という人々の想定をさす。言うまでもなく、「裁つ」「縫ふ」は布で物を作る際に必要な正反対の行為である】。

『後撰和歌集』にもこの種の連接は多く、「咲き散る見れば…」〔後撰二・四七〕、「裁ち縫ふわざはあえずぞありける」〔同五・二二五〕、「明け暮らし守る田のみを刈らせつつ…」〔同五・二六八〕、「遅れ先立つ露や置くらむ」〔同七・三八一〕、「いづかたへとか行き帰るらむ」〔同十三・九四二〕、「下り上り行く雲の身は…」〔同十五・一〇七九〕その他の例がある。

上代語でも中古語でも、連接した二種の動詞が意味的に緩く弱い関係にあったこと、さらにまた、反義を表す二種の動詞さえ直接に連接しえたことなどを、右で確認した。それには然るべき理由がある。上代語にそなわるそのような構文的な特徴が、中古語ではさまざまな表現・言いまわしとして、発展的かつ生産的に発揮されたことを、次に具

体的に見ていくためである。

『萬葉集』には、潮の干満を詠み込んだ次のような歌がある。

8　沖つ島　荒磯の玉藻　潮干満（しほひみち）い隠り行かば　思ほえむかも　〔六・九一八〕

9　荒津（あらつ）の海　之保悲思保美知（しほひしほみち）　時はあれど　いづれの時か　我が恋ひざらむ　〔十七・三八九一〕

前の歌の「潮干（しほひ）満ち」は「潮（が）引き満ち」の意であり、その「干満ち」は反義の動詞が連接したものである。前項の「干（ひ）」は、単音節の上二段動詞「干（ふ）」の連用形である。また、あとの歌の「潮干（しほひ）潮満ち」は「潮（が）引き、潮（が）満ち」の意で、単純な対句のような構成になっている。『伊勢物語』に見える、

10　岩間より　生ふるみるめし　つれなくは　潮干（しほひ）潮満ち　かひもありなむ　〔伊勢七五〕

という歌の「潮干（しほひ）潮満ち」は、反義の動詞が連接した「潮干（しほひ）満ち」を、9と同様にわかりやすく分析的に言い直したかたちの表現であり、より中古語的なものだと言えるだろう。

四

さきにあげた「下（お）り上（のぼ）るもの」「行き帰るらむ」「出で入りにけり」などの中古語の例では、二種の動詞のうち前項

が連用形になっており、その後項は以下の文脈に応じた活用形になっている。こうした反義語の連接形式にきわめて近い上代語の例に、間に接続助詞の「て」が位置する「梅の花咲きて散りなば（咲而落去者）…」〔萬十・一九二三〕、「立ちて居て（立而居而）待てど待ちかね…」〔萬十九・四二五三〕、「難波道を行きて来までと（由伎弖久麻弖等）…」〔萬二十・四四〇七〕その他の例がある。

花について「咲きて散る」と表現する場合は、自然現象として「咲く」が先で「散る」があとである。しかし、人間の所作を表す「立ちて居て」の場合は、常に「立つ」が先で「居る」があとだというわけではない。じっとしていられずに「立つ」「居る」という所作をくり返すということなのだが、表現の習慣として先に「立つ」と言い、次に「居る」と言った、というにすぎない。だから、構文上の特徴から言えば、二種の動詞の間に「て」がある表現は、もともと二種の所作の先後関係を問わないものだ、ということになる。しかし、そのことは、二種の反義語の間に「て」があるかないかに関係なく言えることである。

この構文の系統を引くのが、「秋霧の晴れて曇れば…」〔古今十九・一〇一八〕、「日照りて曇りぬ」〔土佐一月二十三日〕などの、自然現象を描写した表現である。これら反義の動詞を組み合わせた例も、もともとの構文としては、「晴る」と「曇る」のどちらが先でどちらがあとか、「照る」と「曇る」のどちらが先でどちらがあとか、ということを問題にしないものである。そのことは、

11　河内の国、生駒の山を見れば、曇りみ晴れみ、立ち居る雲止まず。　〔伊勢六七〕

という文の「曇りみ晴れみ」を見れば明らかで、『古今和歌集』の「晴れて曇れば」とは逆の順序の組み合わせにな

っている。

さらには、同じ構文の前項が動詞で後項が形容詞という組み合わせになった例だが、

12　世の中は　夢かうつつか　うつつとも　夢とも知らず　ありて無ければ　〔十八・九四二〕

13　世の中に　いづら我が身の　ありて無し　あはれとや言はむ　あな憂とや言はむ　〔十八・九四四〕

という『古今和歌集』の歌の、「ありて無ければ」「ありて無し」という表現もある。どちらの表現も、現代人が単純に読めば「あるというのか、ないというのか」というように、文意を理解するのにとまどう。しかし、これらは「あってないようなものであり、なくてあるようなものだ」の意だから、「あり」「無し」のどちらが主でどちらが従か、ということはもともと問題にする必要がない。やはり、表現の習慣として「あり」が先になり「無し」があとになったにすぎない。あるかないか中途半端な状態だというのだから、語の先後を問わないのは論理的にも当然のことである【『蜻蛉日記』には、「生きて生けらぬ」〔中〕という例がある。「生きてはいても、生きていないのと同じだ」の意である】。

反義の動詞の間に複合助詞の「ては」が置かれた、「行きては来ぬる…」「濡れては干ぬる…」という表現がある。

14　いたづらに　行きては来ぬる　ものゆゑに　見まく欲しさに　誘なはれつつ　〔伊勢六五〕

15　立ち返り　濡れては干ぬる　ものゆゑに　生田の浦の　さがとこそ見れ　〔後撰九・五三三〕

これらは、「て」だけが間にある場合とは異なり、「行き来ぬる」「濡れ干ぬる」を反復する状況を表す【14と同じ歌は、『古今和歌集』〔十三・六二〇〕にも出ている】。

次の歌の「上れば下る」も、14の「行きては来ぬる」や15の「濡れては干ぬる」にきわめて近い表現である。結局は「上ったり下ったりする」の意であり、厳密に「上る」「下る」の順序を問わないものだと考えられる。

16　最上川　上れば下る　稲船の　いなにはあらず　この月ばかり　〔古今二十・一〇九二〕

「上れば下る」では反義の動作の間に、事実上それなりの時間差がある。だから、これは「川藻もぞ枯るれば生ゆる（干者波由流）」〔萬二・一九六〕や、「止めば継がるる（止者継流）恋もするかも」〔同三・三七三〕などのような、上代に既にあった言いまわしの系統を引くものかも知れない。「枯る」と「生ゆ」、「止む」と「継ぐ」は、それぞれ反義をもつ動詞である。

反義の動詞を重ねた言いまわしの一種に、11の「曇りみ晴れみ」がそうであるように、動詞の連用形に接尾辞の「み」を付し、それを「――み――み」という形式で反復する構文がある。この形式は、

17　梓弓　引見緩見（ひきみゆるへみ）　思ひ見て　すでに心は　寄りにしものを　〔十二・二九八六〕

18　はね縵（かづら）　今する妹が　うら若み　咲見愠見（ゑみいかりみ）　付けし紐解く　〔十一・二六二七〕

19　脇挟（わきばさ）む　子の泣くごとに　男じもの　負見抱見（おひみむだきみ）　朝鳥の　音のみ泣きつつ…　〔三・四八一〕

などを始めとして、『萬葉集』に五種・七例ある。意味的に、現代語の「……したり……したりして」という言いかたに相当する。同集にはほかに、17の「引きみ緩へみ」に近い「梓弓引きて緩へぬ大夫や…」が一例あり、また18の「笑みみ怒りみ」に近い「笑みみ笑まずもうち嘆き…」が一例ある。どの例にも共通するのは、人間の行為を表す動詞に「み」を付したものになっている、ということである。

この構文に属する言いまわしは、中古の四作品のなかに一つだけ見える。それは、言うまでもなく11の「曇りみ晴れみ」という例である。ほかに、比較的古い例を探してみると、『落窪物語』に「泣きみ笑ひみしたまふ」〔巻二〕という名詞化した例があり、『蜻蛉日記』に「泣きみ笑ひみ…」〔中・下〕が二例、「照りみ曇りみ…」が一例ある。また、『蜻蛉日記』に見える「降りみ降らずみ…」〔下〕と「玉の緒の絶えず絶えずみ…」〔下〕の二例は、特定の動詞のあとに、同じ動詞に打ち消しの「ず」と接尾辞の「み」とを付して、「――み――ずみ」という形式に仕立てたものである。中古の文献では、人間の行為を表す動詞に限らず、天候という自然現象を表す動詞にも「み」が付く、というかたちで用法が拡張されている【『蜻蛉日記』に見える「玉の緒の絶えず絶えずみ…」は道綱の詠んだ歌に見えるものだが、11以下の「――み――み」はすべて散文の部分に用いられている】。

反義の動詞を重ねた表現でも、中古には類義の二語を重ねたものに、それと反義の二語を重ねたものを連接させた、四語を連接させて用いた例が見える。手紙を読もうとする場面に、「おとど、押し放ち引き寄せて見たまへど、え見たまはで…」〔落窪巻二〕とあるのが、その一例である。老眼のために手紙が読めない、ということである。「押し放ち」と「引き寄せ」とは正反対の動作である。より古い『延喜式』の祝詞に、「参る入り罷り出づる（参入罷出）人の名を問ひ知らし…」〔御門祭〕という例があり、「参る入り」と「罷り出づる」とが正反対の動作であるのに類似する。だから、「押し放ち引き寄せ」は伝統的な構文を用いた表現である。

五

結果的に反義を表すものの組み合わせになるが、特定の動詞と、その動詞に打ち消しの「ず」を付けたものとを重ねた言いまわしが、中古語には多くある。これには、前項としての動詞が連体形になるもの、連用形になるもの、已然形になるものの、計三種がある。

構文的に単純なのは、動詞の連体形と、同じ動詞に「ず」の連体形を付けたものとを重ねた、「知る知らぬ」というような言いまわしである。『古今和歌集』の例をあげる。

右近の馬場のひをりの日、向かひに立てたりける車の下すだれより、女の顔のほのかに見えければ、詠むでつかはしける、

在原業平朝臣

20　見ずもあらず　見もせぬ人の　恋しくは　あやなく今日や　ながめ暮らさむ　〔十一・四七六〕

返し　詠み人知らず

21　知る知らぬ　何かあやなく　わきて言はむ　思ひのみこそ　しるべなりけれ　〔十一・四七七〕

前歌の「見ずもあらず見もせぬ」は、「見なかったのではなく、かといって見たというのでもない」の意である。しっかりとは見えなかった、ということである。この言いまわしに意味的に対応するのがあとの歌の「知る知らぬ」

であり、「（私を）見て知ったとか、知らないとか」の意である【右とほぼ同じ記事・歌が、〔伊勢九九〕に見える】。

21の「知る知らぬ」とは異なり、「かれこれ知る知らぬ送りす」〔土佐十二月二十一日〕の「知る知らぬ」は、「知っている者、知らない者」の意であり、具体的には人物をさす。連体形が人物をさすというのは、「いざ此間（ここ）に行くも行かぬも（行毛不去毛）遊びて帰（ゆ）かむ」〔萬四・五七一〕を見てもわかるように既に上代語にあったが、「知る知らぬ」のように二つの連体形が無助詞のままで、しかも並立的に用いられたものは例が見あたらない。『古今和歌集』や『後撰和歌集』に見える、

22　筑波嶺の　峰の紅葉（もみちば）葉　落ち積もり　知るも知らぬも　なべてかなしも　〔古今二十・一〇九六〕

23　これやこの　行くも帰るも　別れつつ　知るも知らぬも　相坂（あふさか）の関　〔後撰十五・一〇八九〕

などの歌の「知るも知らぬも」「行くも帰るも」のように、並立の助詞の「も」を伴ったものが、上代語から継承した言いまわしだろう。

連体形ではなく連用形を用いたものだが、「杖（つえ）突きも突かずも（杖策毛不衝毛）行きて…」〔萬三・四二〇〕や「咲く花を折りも折らずも（折毛不折毛）…」〔萬十九・四一四七〕などのように、類似する言いまわしでは並立の「も」を付けるのが、上代語では通例である。だから、「知る知らぬ」のように無助詞のままで並立形式にするのは、中古語で新たに獲得された簡潔な言いまわしだと言える【形容詞を用いた「賤しきも良きも盛りはありしものなり」〔古今十七・八八八〕には「も」があり、「高く賤しき苦しかりけり」〔伊勢九三〕にはそれがない】。

前項としての動詞が連用形になり、後項としての同じ動詞が「ず」を伴う、というかたちの組み合わせがある。や

はり、中古の文献に現れるものである。

24　数々に　思ひ思はず　問ひがたみ　身を知る雨は　降りぞ増される　〔伊勢百七〕

25　咲き咲かず　吾にな告げそ　桜花　人伝てにやは　聞かむと思ひし　〔後撰二・六一〕

前歌の「思ひ思はず」を承ける「問ふ」も、あとの歌の「咲き咲かず」を承ける「告ぐ」も、いわゆる引用動詞である。つまり、「思ひ思はず」「咲き咲かず」は一種の引用表現であり、「思ってくれるか、思ってくれないかと」「咲いたとか、咲かないとかと」の意である。

次の歌に見える「ありきあらず」「止めむ止めじ」も同じ系統の言いまわしだが、引用表現が「は」を伴っており、それが主格に仕立てられている。

26　いにしへに　ありきあらずは　知らねども　千歳のためし　君に始めむ　〔古今七・三五三〕

27　別れをば　山の桜に　任せてむ　止めむ止めじは　花のまにまに　〔古今八・三九三〕

これらとは違い、前項の動詞が已然形となり、それが接続助詞を伴ったものを同じ動詞が承ける、という構文の例がある。これもまた、中古になって新たに獲得されたもののようである。

28　梓弓　引けど引かねど　昔より　心は君に　寄りにしものを　〔伊勢二四〕

29　秋の夜の　草のとざしの　わびしきは　あくれどあけぬ　ものにぞありける　〔後撰十三・八九九〕

これらの「引けど引かねど」「明くれど明けぬ」では、後項の動詞が打ち消しの「ね」「ぬ」を伴っているために、句としては反義の表現を組み合わせたものになっている。それぞれ、「引こうが引くまいが」「明けるけれど明けない」の意である。後者は「（夜が）明けても（戸を）開（あ）けない」の意だから、「明く」と「開（あ）く」で語義に違いがあるが、和語としては同じ下二段活用の「あく」である。

次の歌は、秋には日本に飛来し、春には北へ帰って行く「雁（かり）」について、それは「仮（かり）（に日本に留まる）」と言って鳴く、と見なしたものである。

30　秋ごとに　来れど帰れば　たのまぬを　声に立てつつ　かりとのみ鳴く　〔後撰七・三六三〕

「来れど帰れば」の「来」と「帰る」は反義の動詞であり、「来」と「帰る」の間には時間差がある。その点で、16の「最上川上れば下る稲船の…」の「上れば下る」によく似た組み合わせになっている。

続いて、次の歌の構成はどうか。

31　春の色の　至り至らぬ　里はあらじ　咲ける咲かざる　花の見ゆらむ　〔古今二・九三〕

単純に言えば、第二句は「至り至らぬ—里」と掛かり、第四句は「咲ける咲かざる—花」と掛かる。しかし、細かく言えば、前者は「至る—里、至らぬ里」を、そして後者は「咲ける—花、咲かざる花」を、それぞれ短縮したかたちの言いまわしである。

同種の短縮化をさらに推し進めたのが、理解しにくい表現を含む、

32　恋しきが　かたもかたこそ　ありと聞け　立てれ居れども　無き心地かな　〔古今十九・一〇二四〕

という歌の、第四句「立てれ居れども」である。しかし、この種の表現をのちに生むことになる構文・表現は既に上代にあったようで、その一例が「立てれども居れども（立礼杼毛居礼杼毛）共に戯（たはぶ）れ…」〔萬五・九〇四〕だろう。「立てれ」は「立つ」に完了・存続の「り」が付いたものだが、文脈面で「立つ」と「居り」もまた反義を表す動詞である。

反義の動詞を用いたものではないが、表現を短縮化したという点で典型的なのは、次の歌である。

33　月やあらぬ　春や昔の　春ならぬ　吾が身一つは　もとの身にして　〔伊勢四〕

第一句の「月やあらぬ」という表現は、一般的に言えば「月があるのか」の意でしかない。しかし、この句に続いて「春や昔の春ならぬ」を読むことによって、第一句が「月や昔の月ならぬ」の短縮形式であることが自然にわかる、という構成の歌である。歌を読み進めることによって、直前の表現に対して一瞬いだいた疑問がただちに解消すると

いうのは、「謎解き」ではなく「謎解け」とでも呼ぶべき高度な技法である。こうした短縮化は、やはり中古になってから工夫された技巧的なもののようである。

六

やはり、現代人には内容的に矛盾するとしかは思えないものだが、上代の文献には、「家見れど、家も見かねて」〔萬九・一七四〇〕というような言いまわしの例が少なからず見える。「宿借らば、宿貸さむかも」〔萬七・一二四二〕、「寄すとも、寄らじ」〔常陸国風土記四〕「伺候へど、伺候ひえねば」〔萬二・一九九〕その他の例があり、この言いまわしは特定の動詞に限ったものではなかったようである。(4)

同じ動詞や同源の動詞などを、前項と後項として組み合わせたこの種の言いまわしでは、前項の動詞と後項の動詞の表す意味・内容が互いに異なっている。多くの場合、前項の動詞は意図を表し、後項の動詞は意図したことの実現を表す。「（かつて住んでいた）家を見ようとしたが、（その）家も見えず」「宿を借りようとしたら、宿を貸してくれるだろうか」のように、組み合わせた二つの動詞の間には、ある種のアスペクトの相違が認められる。だからこそ、二つの動詞の意味に矛盾・齟齬が生じず、それらを組み合わせることが可能だったのである。

この種の言いまわしには、右にあげた例でもわかるように、もともと未定表現と既定表現とがあり、どちらも中古語に受け継がれた。

34　ふと御幸して御覧ぜば、御覧ぜられなむ。　〔竹取十七〕

35　まねべども、えまねばず。　〔土佐一月十八日〕

前の例は、何とかしてかぐや姫の姿を見たいと願う帝に対し、造麿（みやつこまろ）つまり翁が奏したことばである。「急に狩りの御幸をして御覧になろうとされたら、きっと御覧になれるでしょう」の意の未定表現である。「御覧ぜば」は「御覧になろうとされたら」という意図を表す。「御覧ぜられなむ」は、「（その意図が実現して）御覧になれるでしょう」の意を表す。

あとの例は、ある人物の詠んだ歌に対して『土佐日記』の作者が述べたことばである。「（その歌のとおりに私も口に出して）言ってみようとしても、言うことができない」の意の既定表現である。言うまでもなく、「まねぶ」は「まねて再現する」の意だが、二つのそれの間にはやはり意図・実現という、アスペクトの相違がある。

次の歌の第一句・第二句に用いられた「行く」「行きやられ」の間にも、意味の相違がある。

36　行けどなほ　行きやられぬは　妹が績（う）む　小津の浦なる　岸の松原　〔土佐二月五日〕

簡単に言えば、「小津の浦の岸の松原は、延々と続いていて行き尽くせない」の意の既定表現である。『萬葉集』には、右の第一句・第二句とよく似た状況を詠み込んだ、「来れど、来かねて」〔九・一七三三〕という表現が見える。「来れど、来かねて」は、「ある場所まではやって来たが、それ以上はさきに進めずに」の意だが、なかなか状況が把握しにくい。これに対して、右の「行けど、なほ行きやられぬは」は、「なほ」と「やられぬ」とが加えられているから、状況がよくわかる。中古の歌の方が、表現においてより分析的になっている。

『後撰和歌集』に見える「死出の山、越ゆとも越さむ」は、以上の類例である。

37　もろともに　いざと言はずは　死出の山　越ゆとも越さむ　ものならなくに　〔後撰十三・九六二〕

「一緒にさあ、と言って誘わなければ、死出の山は越えようにも越えられないのだ」という意味の歌である。「越ゆ」は「越えようとする」の意、「越さむ」は「（実際に）越すことができるだろう」の意である。「越ゆ」と「越す」とは同源の語だが、別の動詞である。

同じ動詞や同源の動詞などを組み合わせたものではないが、次の「親のあはすれども、聞かでなむありける」は無視できない例である。

38　男はこの女をこそ得めと思ふ、女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども、聞かでなむ　ありける。　〔伊勢二三〕

「親のあはすれども」は、「女の親が、女をほかの男と結婚させようとしたが」の意だから、「あはす」は意図を表す。また、「聞かでなむありける」は「（女は実際に）それに耳を貸さないでいた」の意であり、実際の事態を述べたものである。「親のあはせむとすれども、女はあはでなむありける」と、ほぼ同意の言いまわしである。前項としての動詞が意図を表すには、それが後項としての動詞と同じものである必要がなく、また前項と後項の動詞が同源のものである必要もなかった、ということがこの例によってよくわかる。

七

ところで、「地さへ裂けて照る日（地副割而照日）」〔十・一九九五〕や「池水に影さへ見えて咲きにほふ（可気左倍見要氐左伎尓保布）馬酔木の花」〔二十・四五一二〕や「袖さへ濡れて朝菜摘みてむ（袖左倍所沾而朝菜採手六）」〔六・九五七〕などのように、連用修飾語と被連用修飾語との関係が現代語と異なる言いまわしが、上代語には少なからずあった。(5) これらの言いまわしもまた、現代人が読む場合に大きな違和感を与える。現代語としては、「土まで裂けるほどに照らす日」「池の水に影まで映して、色もくっきりと咲いている馬酔木の花」「袖まで濡らして朝の菜を摘もう」などと表現すれば、わかりやすくなる。つまり、「照る」「見えて」「濡れて」などの自動詞を用いた表現を、他動詞を用いた「照らす」「映して」「濡らして」などに入れ換えれば、現代語としてより自然なものになる。同じような修飾成分・被修飾成分の例はほかにも数が多いので、次にはこうした構文について考える。

右にあげた実例のように、上代語の表現では、単に事態を描写した連用修飾成分をそのまま被修飾成分の前に置くことが可能だった。これに対して、現代語では両成分の意味的な関係を考慮して、自動詞・他動詞を使い分けなければならない。現代語では、文を構成する語句どうしの意味関係がそれほどに緊密なのだが、上代語では逆にそれが緩くて弱かったのである【上代語では、現代語のようには自動詞・他動詞の対が揃っていなかった、という言語的な事情もある】。

中古の四作品を見ると、右の「袖さへ濡れて朝菜摘みてむ」によく似た、「袖浸ちて…」という『古今和歌集』の表現がある。

39　袖浸ちて　むすびし水の　凍れるを　春立つ今日の　風や解くらむ　〔一・二〕

「浸ち」は他動詞「浸たし」の自動詞であり、第一句・第二句を直訳すれば、「袖が濡れてすくい上げた水が…」のようになる。現代語ならば、やはり他動詞を用いて「袖を濡らして手ですくい上げた水が…」と言うはずのところである。しかし、この歌ではそうした調整をすることもなく、連用修飾成分の「袖浸ちて」がそのまま、被修飾成分である「むすびし…」の前に置かれたように見える。

さらに、上代の「池水に影さへ見えて咲きにほふ馬酔木の花」に似た、修飾・被修飾の関係を示す表現が、『後撰和歌集』にある。

40　賀茂河の　水底澄みて　照る月を　行きて見むとや　夏祓へする　〔四・二一五〕

「水底澄みて照る月」の直訳は「水底が澄んで照る月」となるが、それは現代語として不自然である。わかりやすく言い換えれば、「水底が澄んで見えるほどに、明るく照らす月」ということである。これは、「池の水に影まで映して、色もくっきりと咲いている馬酔木の花」という意味の、「池水に影さへ見えて咲きにほふ馬酔木の花」（既出）にその状況が似ている。

一方また、「水底澄みて」という状況が実現したのは、「照る月」によることである。だから、現代人には、修飾成分と被修飾成分とを逆に配置して「照る月に水底澄みて」とでもするのがより自然だ、と思われる。「水底澄みて」

と「照る月」とはどちらも作者が目にした情景であることは確かなのだが、作者はそれらを単純に並べただけだ、という印象を受ける。

『竹取物語』には、

41　これをかぐや姫聞きて、「我はこの皇子に負けぬべし」と胸つぶれて思ひけり。　〔六八〕

という散文の例がある。くらもちの皇子が、かぐや姫の要求したとおりに「蓬莱の玉の枝」を手に入れて帰って来た、と聞いた姫の心情を、この文では「胸つぶれて思ひけり」と描写している。現代語でならば、「胸がつぶれるほどに思い悩んだ」ということになる。「胸つぶれて」をそのまま「思ひけり」の前に置くというのは、現代人の感覚では唐突すぎるのだが、当時はそれで何も問題がなかった。『落窪物語』にも「胸つぶれて思ふ」という表現が複数出ているが、そのうち「胸うちつぶれて思ふ」〔巻二〕は用法が異なり、期待して喜ぶ状況を描写するのに用いられている。

『竹取物語』の冒頭近くに「三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり」とあり、その「いとうつくしうてゐたり」と41の「胸つぶれて思ひけり」とは同種の構文に属するという指摘がある。妥当な指摘であり、同じ指摘が、『伊勢物語』の、

42　笛をいとおもしろく吹きて、声はをかしうてぞ、あはれに歌ひける　〔六五〕

に見える、「をかしうてぞ」と「歌ひける」との関係についてもあてはまる。

ただし、同種の構文に属する例は数が少ない。

八

本稿では、動詞が構成する数種の構文・言いまわしを取り上げ、上代から中古への変化が具体的にどのようなものであるかを、多くの実例を掲げて検討してきた。そして、その際には、上代から継承した中古の表現では、どういう点がどのようなかたちで変化しているかを、検討の中心に据えた。その結果を簡単に言えば、中古では上代のものを素直・単純に継承しているのではなく、多くの場合に、上代のものに工夫を加えて用法を発展・拡大させている、ということである。

これは当然と言えば当然だが、特定の構文・言いまわしを、単純に上代から継承して用いているのではなく、それらに時代の要請に応じるかたちで変更を加えて用いている、という点を見落としてはならない。継承したものに変更を加えて用いるのは、言うまでもなく、当時の人々にとって一つの創造に属する行為だっただろう。

註

（1）小著『上代日本語構文史論考』〔二〇一六年、おうふう〕の第Ⅰ部第一章。

（2）（1）にあげた小著の第Ⅰ部第一章と、「上代語の同族目的語構文を再考する」〔学習院大学文学部『研究年報』第64輯、平成三十年三月〕。

（3）これについて小論の筆者が最初に言及したのは、二〇一七年十二月十六日に学習院女子大学で開催された、古事記学会の月例会においてである。当日は「上代日本語はどのような言語か――歌句の続きかたから――」というタイトルで講演したが、その場で配布した資料の「互いに反義を表す動詞が直接に重なる」の箇所に上代の実例を挙示し、解説を付してある。その後、「上代日本語の動詞の用法――動詞連接の意味的な分属と反義語の連接――」〔学習院大学文学部『研究年報』第65輯、平成三十一年三月〕でも、詳しく私見を述べた。

（4）注（1）にあげた小著の第Ⅰ部第四章。

（5）注（1）にあげた小著の第Ⅰ部第六章。